

第9期淡路地域ビジョン委員会第3回全体会 概要

- 1 日 時 平成30年6月16日(土) 13:00～15:30
- 2 場 所 洲本総合庁舎内 3階会議室A・B
- 3 参加者 淡路地域ビジョン委員等 47名
(委員43名、講師1名、新行政課1名、事務局2名)
- 4 議事概要
 - (1) 開会
 - (2) 開会あいさつ
小田 美根子委員長
 - (3) 兵庫県の行財政構造改革についての説明
企画県民部企画財政局新行政課
副課長 増澤 清嗣 氏
 - ・別添資料「兵庫の行革～ひょうごの未来づくりのために～」に基づいて説明。
 - (4) 講演「淡路島を知る～淡路学から～」
講師 投石 文子 専門委員
 - ア ・淡路に住んでいる方は、淡路の素晴らしさを当たり前のように感じているが、そうではないことが多い。
 - ・子供達が淡路のことを知らないことが多く、淡路島の教科書として『淡路学読本』を作成した。
 - ・私が(株)JTBの旅行商品を一緒に考えた時に、「すごいな」という淡路弁が無いかと聞かれ、由良弁「げっちえ」を使い、「げっちえ淡路島」というキャッチフレーズを作った。
 - ・淡路島とは
 - ①古事記・日本書紀の冒頭「国生み神話」で日本で最初に生まれた島とされている。
 - ②大和朝廷に食料を献上した「御食都国」である。
 - ③「淡路人形浄瑠璃」など多彩な伝統芸能がある。
 - ④銅鐸が発見される宝島である。
 - ・淡路島を外から見ると
 - ①京阪神から日帰りできる気軽な観光地となっている。
 - ②阪神淡路大震災の震源地のイメージがあるが、「震災の島から花の島」へ転換した。『淡路公園島憲章』を基に出来たのが当初の淡

路地域ビジョンだった。

- ・自然環境だけでなく、社会環境を含めた豊富な地域資源を活かした「環境立島」のスローガンを通してこれまでの淡路地域ビジョンがある。
- ・明石海峡、鳴門海峡、紀淡海峡の3つの海峡のある島は他に無い。そのことによって渦潮が発生していることも素晴らしい。
- ・65歳以上人口比率が36%を越えている。このことを強みにしていくこともビジョン委員会が考えるポイントになる。
- ・観光客は神戸の半分にも満たない。まだまだ可能性があるので、地域外に向けて発信していく必要がある。

イ 『淡路学読本』の内容

- ・記紀に登場する「国生み神話」は、沼矛、渦、おのころ島などの淡路島特有のものが凝縮されたものである。
- ・沼島を上から見ると勾玉の形をしており、沼矛の「沼」には「きれいな、飾りの付いた」という意味が有るので、おのころ島伝承にぴったりの島である。
- ・『日本書紀』の允恭天皇のくだりに、淡路島は狩猟の場であったという記述がある。
- ・『古事記下巻』の仁徳天皇のくだりには、御井の清水から毎日上質水を献上したという記述がある。
- ・海人族の持っていた製塩の技術は、「国生み神話」のストーリーに関わっていると思われる。
- ・沼島の「鞆型褶曲」は、世界で2箇所で見られないと聞いている。
- ・淡路島には中央構造線が通っており、淡路島の北部と中部は花崗岩、南部は砂岩・泥岩、沼島は結晶片岩で、地質が異なっている。
- ・淡路島の年平均気温は約16度、日照時間は約2千時間で、兵庫県北部の方から見ると、冬場に外で洗濯物を干せることが羨ましいと言われる。
- ・柳沢の滝池に関しては、『淡路国大田文』田畑の記録に、元禄時代に10年かけて完成した記録が残っている。
- ・洲本に竹の節の間に黒い縦線が入る「芽黒竹」という珍しい竹が自生している。
- ・「シロミノヤブムラサキ」は、淡路島だけに自生している。
- ・民話が残っている中で、太平記巻十八に載っている「沼島じょうろう」の話がおもしろい。じょうろうは高貴な婦人という意味。

- ・自分の首から箱をぶら下げて人形を操っていた箱回しが人形浄瑠璃の元々の起源だと言われている。だんだん人形が大きくなって人形浄瑠璃になった。百太夫の子孫が三條村で人形浄瑠璃を広めていったことは淡路島の大きな財産である。
- ・淡路島には沢山の神事があり、布団だんじり、舟だんじり、遣いだんじりなど豊かな祭りが多く、だんじり唄は世界唯一。
- ・賀集珉平の珉平焼は、1839年に阿波藩の御用陶器所となった。
- ・郷土料理「ちょぼ汁」があるが、郷土料理のアレンジをビジョン委員会で提案してもおもしろいと思う。
- ・「どんざ」は淡路独特の言い方で、普通は「どてら」と言う。きれいな幾何学模様で作るのは淡路島特有のもの。こういった文化をどこかで伝承して行って欲しい。
- ・淡路島の特徴的な家屋の造りとして、オモテに床の間と仏壇がある。客間の格が一番高くなっており、お客様を大事にする作りになっている。
- ・淡路島の地場産業のそうめんは細いことが有名。技術を持っている職人のことを糸手師という。地場産業の景気を上向きにしていくこともビジョン委員会で一緒に考えて行きたい。
- ・島内の商店街が廃れてきているが、地元の人を大事にして活性化を図ることもビジョン委員会として考えていく必要がある。
- ・淡路島は新聞発祥の地といわれている。明治10年に淡路新聞が発行された。明治13年に、淡路新聞に関わっていた人が中心となり神戸新聞を創刊した。
- ・高田屋嘉兵衛、三島徳七、田中万米などの淡路島の偉人を顕彰して活性化につなげることも大事である。

ウ 淡路地域ビジョン

- ・当初は、淡路公園島憲章を基に淡路地域ビジョンを作った。理念は、幸せになるためにはどういう島にしていくかということで、6本の実践目標（花いっぱい美しい島、文化が広がる島、人をはぐくむ島、魅力ある産業を興す島、安全で安心な島、心あふれる交流の島）を立てた。
- ・淡路をガーデンアイランドのようにして、住んでいる人が美しい所に住める島、心豊かに住める島にしようということが、最初の淡路地域ビジョンの目標であった。

エ 約 10 年間の変化

- ・淡路島も地球温暖化の影響を受けている。年平均気温が 0.7℃上昇、年平均日照時間も 32 時間増。
- ・淡路島の瓦産業から「陶器瓦」が消えつつある。
- ・三洋電機洲本工場がなくなった。「パナソニックグループ オートモーティブ&インダストリアル システム社 三洋電機株式会社 小型電池事業部」の本拠地。
- ・海上交通から陸上交通となりフェリーが消えた。船の文化を取り戻すことが大事。地域ビジョン委員会から提案してはどうか。
- ・素麺業者が激減した。組合員が 40 から 15 になった。

オ 「淡路学」を学ぶ意義

- ・淡路島を「知ること」により淡路島に対する誇りが生まれる（アイデンティティの醸成）。
- ・淡路島を「知ること」により地域を良くすることができる（地域創造）。
- ・グローバル化に対応できるのは、真に淡路島を語れる人（人材育成）。
- ・島内の高校卒業生全員に改訂淡路学読本ダイジェスト版「あなにやし淡路島」を配付している。

カ インバウンドの動向

- ・八重山諸島に竹富島があるが、住民は約 150 人なのに知名度がある。島の祭りなどに国内外から多くの観光客が訪れている。淡路島も国外の人にもっと来ていただくことが大事である。
- ・地域の知恵をもっと活用して世界に働きかけることで有名になれる。

(5) 閉会

<開会あいさつ>



<兵庫県の実財政構造改革についての説明>



<講演「淡路島を知る～淡路学から～」>

